

イタリア写真紀行

1995年6月30日～7月9日



信天翁

目次

1. ローマのパンテオン
2. ナヴォーナ広場
3. サン・ピエトロ寺院
4. チェスティオのピラミッド
5. トラヤヌスの記念柱
6. カピトリノの丘から
7. ローマの凱旋門
8. コロッセオ
9. コルソー通り
10. アッシジのミネルヴァ神殿
11. フィレンツェの街並み
12. ピサの「奇跡の広場」
13. ボローニャの斜塔
14. ヴェネチアのサン・マルコ大聖堂
15. ヴィチエンツァのオリンピコ劇場
16. ヴィチエンツァのロトンダ
17. ヴェローナのアリーナ
18. ミラノのドウオモ
19. ミラノのガッレリア
20. スフォルツァ城の安らぎ

★はしがき

1786年9月3日の朝、チェコのカールスバートを密かに出発したF・メラーという商人こそ、フォン・シュタイン夫人との愛に悩みワイマールを去ったヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテその人であった。行き先はイタリア。憧れの文化の国、古代が厳然と存在するイタリア。ゲーテが「もっと早く来るべきであった」と述懐しているイタリアで見たものは何であったか。学生時代に繙いたゲーテの「イタリア紀行」を再読するうちに、その一端を自分の目で確かめたくなった私は、急遽イタリア・ツアーに入れて貰って6月30日に成田を出発したのだった。

ゲーテは友人ヘルダーに宛てた手紙の中で「ローマは一個の世界であって、それに通暁するには先ず数年を必要とする。だから、通り一遍の見物をして立ち去っていく旅行者を見ると、かえって羨ましいくらいだ」と言っている。詩人であり、哲学者であり、文学、政治にも通じ、美術、音楽、鉱物、植物にも強い関心を抱いていた超ド級のこの文化人は、200年後の軽薄な日本人のイタリア・ツアーをあざ笑っているように思えるが、ここで怯むと先へ進まないので敢えて開き直すこととしよう。

当然のことながらゲーテはイタリア語をマスターして彼の地へ乗り込み、日常生活を通じてイタリアを理解していったのだから、ガイドさん頼りの我々の旅行とは訳が違うが、それでもたった一つだけゲーテの羨むものを私達は持っている。それはカメラだ。カメラのない時代、ゲーテは文章では表しきれない状況を友人に伝えるべく、絵を使うことを考えたのである。その為にわざわざ絵画の専門家について基本を勉強し、事実相当に上達もしたらしいが、私はカメラの力を借り、僭越にも「イタリア写真紀行」なる一文を進呈させて頂くこととしたい。

ゲーテは馬車でオーストリアのインスブルックからブレンナー峠を経てイタリアに入り、ヴェローナ、ヴィチエンツァ、ヴェネツィア、ボローニャ、アッシジを経てローマに到達したが、我々はアルプス越えてローマに入り、ゲーテとは逆のルートでイタリアを見物することになった。



1. ローマのパンテオン

パンテオンは古代建築物の中で原形が完全に残っているものでは最も古い建物で、後世のドーム構造に大きな影響を及ぼした最大傑作である。これに触れゲートは「内外の偉大さにすっかり心を打たれた」と記している。

その内外の外とはロトンダ広場といわれる正面の空間のことで、ゲートはそのカフェテラスに腰を下ろして広場を眺め、しばしパンテオンの歴史に思いを馳せたのではないかと想像される。今も多くの人々に親しまれている小さな空間は、何とも言えない安らぎを与えてくれ、噴水の飛沫越しに立ち上がるパンテオンと共に素晴らしい雰囲気の中にある。

紀元前27年、オリンポスの神々を祭る神殿として創設されたが、その当時の一部が今でもこの建物の背面に立派に残っていた。2世紀に再建され、7世紀にビザンチン皇帝から教皇ボニファティウス4世に献上、聖母と殉教者を祭る教会となったため他の古代遺跡のような破壊や略奪を免れた。その入り口のコリント式のピロティー（円柱）は花崗岩の一本彫りである。16本のピロティーを通して内部に足を運ぶと、包み込むような空間の大きさと各部のディテールの神聖な感じに圧倒される。そして、天井中央の丸い天窓から直かに流れ込んでくる斜光は壮観で、まるでレンブラントの名画を眺めているようであった。（2世紀）



そして、曲がりくねった横町の石畳にふと足を踏み入ると、急にこんな尼僧が現れて、一気に1000年ぐらいタイムスリップしたような錯覚に襲われた。



(ロトンダ広場の噴水越しに眺めるパンテオン)



2. ナヴォーナ広場

バロック時代に整備されたローマの街は放射状に道路が延び、それぞれの要に無数の広場が散りばめられている。その広場の中でも飛びつき魅力に飛んでいるのがナヴォーナ広場である。

古代ローマの円形競技場を原形にした、長さ246m、幅65mの細長い広場は、石彫を施した三組の噴水によって巧みに演出されている。中央の「四大河の噴水」はベルニーニの作で、オベリスク（方尖柱）を中心に、周囲には四大大陸を代表するガンジス、ナイル、ドナウ、ラプラタの大河を象徴する偶像が配されている。この噴水の前には、ベルニーニのライバルであったボッロミーニの手になるサンタアニューゼ・イン・アゴーネ教会が建っていて、最も円熟したローマ・バロックの神髄に接することができる。

ここは観光客のメッカであると同時にローマ市民の日常生活には欠かせない広場で、夏は夕涼みの人達で賑わい、クリスマスやキリストの顕現祭には露店のおもちゃ市が立つ。

ゲーテの紀行文にはこの広場は登場しない。18世紀のゲーテにとって、17世紀の建造物は新し過ぎて余り感動を与えなかったのだろうか。（17世紀）



3. サン・ピエトロ寺院

「この幸福の日の記念を生き生きと保存し、・・・・・・事実のままお知らせしよう」
汎神論的な考えの持ち主だったゲーテはヴァチカンのサン・ピエトロ寺院を訪れた日の事を
こう記している。そして広場を歩き、暑くなるとオベリスク（方尖柱）の影で休息し、近く
で買った葡萄を食べたりしている。

システィーナ礼拝堂ではミケランジェロの「最後の審判」の天井画を見て「眺め入っては
ただ驚くのみであった」と感嘆している。寺院内外の空間の広さ、偉大さ、華麗さなどに心
を打たれたゲーテは、クーポラにも登りローマ市を見、寺院を真下に眺めた。それは驚嘆を
誘う体験だったことであろう。ヴァチカンのカトリックを超越した造形は、心ある人を魅了
する。そして、その人はもっと時間を欲しいなと考えるだろう。（16～17世紀）



世界最大の教会サン・ピエトロ寺院に足を踏み入ると、無宗教な私も自然に帽子をとり、いつの間にか深々と頭を下げていた。少し落ち着いて天井を眺めその華麗さに驚嘆、そしていつの時代の作品かも分からないが、生きているような石像の迫りに圧倒された。飛鳥白鳳時代の仏像に永年親しんできた私達にも、それは新鮮な興奮だった。

フラッシュ禁止、三脚禁止の暗い堂内を想定し、予め用意したISO-800の新しいフィルムがセント・エレナの像をこんな風に浮かび上がらせた。



4. チェスティオのピラミッド

ゲアテはローマに滞在中精力的に多くのものに接近していったが、中でもチェスティオのピラミッドの見物に出かけた11月10日の手紙には、「ローマにはこせこせしたものが少ない。無趣味なものもないわけではないが、そういった点もまたローマのもつ偉大さの一要素だ」と記している。

面の組み合わせだけで、その存在を際立たせた幾何学的な外形は、ゲアテには無趣味と映ったのであろうか。しかし暫く眺めている中に、このピラミッドは素直に視界に入り込み、いっぺんに心に刻印されたのだろう。あるいはこれまでの旅で見たことのないピラミッドが発する強烈なシグナルを、初めは馴染み難いものと思いながら、やがて「偉大なもの」と感じとっていったとも考えられる。

高さ27桁、底辺の一辺が22桁の白い大理石の姿はサン・パオロ門の傍らにあり、見慣れたエジプトのピラミッドと違い、私にはなぜか少し異様に見えた。紀元前12年に330日の工期をかけて建てられたこの造形を他の人々はどう感じるのだろうか。（紀元前1世紀）



5. トラヤヌスの記念柱

シチリアからローマに帰ってきたゲーテは「私は余りにも大きな学校に入学してしまったために、なかなか急に卒業が許されない・・・」と記している。自分自身の知識や才能が「この地で徹底的に完成され、完全に円熟させられなければならない」という願望の表れである。

毎日彼は精力的な活動を続けたが、ある夕方、トラヤヌスの記念柱に登った。そこを209年後に訪ねてみると、高さ40呎ばかりの柱の周囲にはポエニ戦争の場面が絵巻物のように浮き彫りで描かれてあった。近付いて観察すると、柱を建てた後に卓越した技術と計算で彫られているのが分かる。全長200呎に及ぶ彫刻の帯は上に行くほど幅が広く大きくなっていて、見上げたとき同じ幅になるように工夫されている。距離の差を読み取る目の技法が1900年も昔に完成されていたのに私は驚いた。

今も残る歴史的な遺跡の中でも、この記念柱は過去の存在を強烈にアピールして、現在の人々に訴えている。「ローマは一日にして成らず」を痛感した。(2世紀)



6. カピトリーノの丘から

1788年2月、ゲーテはカピトリーノの丘にあるローマ元老議員の邸宅に招かれた。それはごく内輪の音楽会であったので招待主に対して儀礼を欠いてはいけないと思い、余り景色にうつつを抜かすわけにはいかなかったと言いつてしているが、その窓から眺めた風景は正に絶品で、「落日の際の窓からの眺望は他に比類のないほどの光景で、とくにコロッセオに面した展望は無限の価値ある享楽である」と最大級の形容で絶賛している。そして、有名な画家の銅版画を見ることを友人に薦め「ただし燃え立つような色彩やそこから生じる一切の魅惑は、想像によって補われなければならない」と述べている。

私達が訪れたときのカピトリーノの丘からの眺望は、勿論ゲーテの言うような落日の風景ではなかったが、ローマ発祥の歴史を直かに見る想いで胸が高鳴った。



7. ローマの凱旋門

古代ローマ共和制時代には戦勝将軍の凱旋記念として盛んにアーチ門が作られたが、その多くは今遺構として残っている。そんな中で紀元81年、エルサレムでの戦勝を記念して造られたティトゥス帝の凱旋門は保存状態も良く、当時を代表する建造物として多くの人々の目を楽しませてくれる。そしてフォロ・ロマーノのセヴェルスの凱旋門は3つのアーチを持つ華麗なもので、大理石の化粧版には2回に亘るパルティアとの戦いが描かれ、重厚な装飾となっている。(3世紀)

ゲーテはこの凱旋門には特別の思い出があったのか、ローマを離れる直前のある夜ここを訪れてこんな手紙に書き残した。「セヴェルスの凱旋門は、黒い影を投じながら黒々と私の前に立っていた。・・・日頃よく見慣れた事物が、異様に、また幽霊のように浮かび出ていた」というから、それは鬼気迫る情景だったと想像される。

(セヴェルスの凱旋門)



そしてコロッセオの脇に立つコンスタンチヌスの凱旋門は、ミルヴィオ橋の戦勝を記念し315年に建てられた。高さ28mのこのアーチはローマでは最も大きく、表面の装飾には古代の建造物から持ってこられたものが使われている。パリのエトアールの凱旋門やカルーゼルの凱旋門などはローマのそれを原型としてデザインされたものと思われるが、今回オリジナルの美しさを満喫することが出来た。(4世紀)



(コロッセオからティトゥスの凱旋門を望む)



8. コロッセオ

ゲーテの説明を待つまでもなく、コロッセオはローマを代表する古代の建造物である。ヴェスパシアヌス帝の命で建設が始められ（72年）その息子ティトゥス帝の時代に完成した。周囲527㍍、高さ57㍍、5万人収容という巨大な建築物で、落成のときはここで猛獣や剣闘士の殺し合いを初めとする催しが100日間も続いたという。競技場の床部分が失われ地下構造が見えるが、ここには各種の舞台装置や猛獣の檻が置かれ、またこの地下道を通じて死体などが片づけられた。

コロッセオは後に殉教したキリスト教徒達の祭の場となったので、毎年記念行事が行われ今は昔の凄惨なイメージは残っていない。12世紀末の有名な言葉に「コロッセオがある限りローマは存在するだろう。コロッセオが崩れるときローマは終わりになるだろう。ローマが終わるとき世界も終わる」というのがあるが、コロッセオも、ローマも、世界も今は健在だ。

我々が訪れたとき明るい夏の太陽のもとあちこちで新婚さんに遭遇したが、これは教会でごく内輪の式を挙げ、そのあと名所旧跡を訪ね大勢の人々の前で記念写真を撮るという風習に基づくものであった。それは「コロッセオある限り夫婦は健在である」と祝福されているようでまことにほほえましく、つい演出過剰の日本の結婚式を思い浮かべてしまった。

（1世紀）



9. コルソー通り

ポポロ広場からヴェネツィア宮殿に至る約1800年のコルソー通りは、有名な謝肉祭の舞台である。普段何の変哲もないこの通りも謝肉祭を迎えると様相は一変するのだが、ゲーテは友人に長文のレポートを送り、乱痴気騒ぎのこのお祭を活写している。

「・・・バルコニーというバルコニー、窓という窓には次々と毛氈が掛けられ、街路の両側の一段と高くなっている舗道には椅子が持ち出され、身分の低い借家人たちやすべての子供は街路に出てくる。街路はもはや人の通路ではなく、それはむしろ宴会の大広間か装飾された巨大な画廊にも等しいものとなる・・・」という具合である。

スペイン広場からホテルへの帰りにコルソー通りを散策し、謝肉祭になったら一変するというコルソー通りの表情を思い浮かべた。「その騒がしさにほとんど閉口した」とゲーテは言っているが、内心では結構楽しんでいたのではないかと私は想像する。



10. アッシジのミネルヴァ神殿

ローマを目指す途中、ゲーテはアッシジに立ち寄った。しかし、有名な聖フランチェスコ寺院は見物していない。二層からなる建築のうち、巨大な下層建築に「嫌悪の念」を覚えたからという。これをやり過ごして訪れたのが、旧市街にあるミネルヴァ神殿である。そして「見よ、最も賞賛すべき建築が私の眼前に立っているではないか」と、アウグストゥス皇帝（ローマ帝国の初代皇帝）時代に建てられた神殿に感動している。

彼はアッシジのように小さな町には、この神殿のようなつましい建築がふさわしいと考えたらしい。「都市はいかにして建てられ、神殿や公共の建物はいかに置かれるべきか」に注目しているのだ。いわば都市と自然との調和や環境空間という今日的な問題の原点に言及しており、その鋭いセンスに私は驚かされる。

ゲーテは「正面の辺りはいくら見ても見飽きる事はなかった」とも書いた。これは神殿の入口にある柱の間を通る階段が巧妙な造りであるのを見抜いたからだと思う。人はこの石段を通じて、前の広場から内部へとごく自然に導かれる。彼は永遠の建築に秘められた創造の意図を瞬間のうちに読みとったのだろうか。（紀元前1世紀～1世紀）



11. フィレンツェの街並み

ゲーテはフィレンツェに立ち寄り大急ぎで大聖堂や洗礼堂を見て廻ったが、滞在してはいない。ゲーテにとってこの街は魅力が乏しかったのか？とも思うが、案外ローマへの道を急いだというのが本当のところかも知れない。短い時間であったが、フィレンツェに関する彼の感想は「・・・この都会を見ると、これを建設した人民の裕福さが偲ばれる。・・・この地において、すべては堅実であると共に清潔であり、かつ優美さを忘れないで、しかも使用と公益がその目的になっている。至るところに生き生きした注意深さが窺われる。それに引きかえ法王の国家は・・・」と的を突いている。高さ90mの大聖堂の屋上から街並みを眺めながら、私はこの街の市民がいかに街全体と協調しているかを実感した。見事に揃った屋根の色、妙なビルはなし、看板なし、それは見事なハーモニーとして、ここを訪れた人の脳裏に刻み込まれるだろう。眼下に見える病院の回廊、朱色の屋根瓦にマッチした礼拝堂の緑青が印象的だった。



12. ピサの「奇跡の広場」

人間が日常作るものは、その時どきの必要や実用のためのものが殆どで、特に大したものはない。しかし、ごく稀に偶然と奇跡が重なって、ものすごいものを創ってしまう事がある。

広大な緑の草原に、白い大理石の円筒形、直方体、細い円柱形と、全く形の異なる三つの巨大な建造物が、どんだんと並んである。青い空をバックにそれぞれが明快なカタチを浮き出していて現実離れした模型のようにも見えるが、取り囲む観光客の群れが蟻のように小さいので、これらの建造物がいかに巨大なものが分かる。

洗礼堂、大聖堂、そして斜めに建つ斜塔。どの建物も繊細なレース編みのような大小無数のアーチによって覆われている。この統一されたピサ・ロマネスク様式のイメージと、建物の大きさや配置のバランスの良さが、工事が何世紀にも渡った事を忘れさせて、まるで一気にこの世に出現したように感じさせる。

ここを人々は「奇跡の広場」と呼ぶが、その奇跡は実は複数であって、なにも斜塔ばかりではないのである。12～13世紀、ピサが大海運国として繁栄していた当時の文化が、この奇跡の広場に凝縮しているのだろう。(11世紀～14世紀)



13. ボローニャの斜塔

この世には円や四角が立ち上がった形の幾多の塔があるが、2基並んだボローニャの斜塔ほどストイックとも言える殺風景な塔は稀であろう。ゲートは高い方のアシネリ塔に昇って眺望の素晴らしさ后感嘆し、上から見た屋根瓦の素材の良さにも感心している。しかし、「斜塔はいやな眺めであるが、しかしわざとこういうものを建てたに相違ない。まっ直な塔では月並みなものになってしまい、一つの斜塔が建てられた」と解釈し、「馬鹿げたもの」と記している。

今でも、人や車の行き交うポルタ・ラヴェニャーナ広場から見上げると、角張って塞がれた面が聳え、レンガの層となって倒れかかってくるように感じられる。地味な形態と単一の素材は無愛想だ。しかし妙に気になる造形だ。どう見てもキリスト教の鐘楼ではなく、中世貴族の絶え間のない私闘のための軍事塔であったのは明白である。往時、200もあった塔のうちこの二つの塔だけがなぜ傾斜して存在しているのかは、依然として大きな謎である。日本にも沢山いる目立ちたがり屋がここにも居たのかと私は思うのだが・・・。

私達がボローニャの斜塔を訪ねたときは雨だったが、世界最長のアーケードを持つこの町では傘は不要だった。(11世紀)



14. ヴェネチアのサン・マルコ大聖堂

ヴェネチア、「この不思議な島の町」。ここまで来ることは「運命の書物の私のページに既に書き記されてあったのだ」とゲーテは記した。初めてゴンドラを目にしたとき、かつて父親が持ち帰った美しいゴンドラの模型を思い出して、それで遊んだ昔を懐かしんでいる。「運命」と少年時代の記憶を心の中で重ねていたのだろうか。

町の中心にあるサン・マルコ大聖堂では、今でも円蓋や円天井を飾る沢山のモザイク画が、人々の目を奪う。これについて、ゲーテは「下絵を描いた画家の腕によって、非常に良いものもあり、良くないものもある」と冷静に観察している。

モザイク画の魅力は全体の神秘感にあり、それは小さな大理石やガラス片で出来た素材の集積技術、いわば密度によって支えられている。角材の素材を曲面や平面に埋め込むわけであるが、その作業の元になる下絵の優劣が、作品の出来不出来につながってくるのだ。

ゲーテが「すべては最初の考案が問題」と、一目見てその本質を看破しているのには目を見張る思いがした。旅の折々で、天体、自然、そして小さな鉱石にまで強い関心を持つほど強い知的好奇心があったからこそ、点によって大きな平面を構成する造形の本質を捉えたのであろう。(11世紀)



(サン・マルコ大聖堂の偉容)



私達はちょっとばかり贅沢をして、セレナーデの歌手を雇って gondola の夕べを楽しんだ。石造の建物に囲まれた水面の舞台での歌声はよく反響した。クルマのいない雑音の少ない町ヴェネツィアは数少ない地球上の楽園のように思えた。



15. ヴィチェンツァのオリンピコ劇場

ゲーテはヴィチェンツァに着くとすぐルネサンスの天才的建築家パラディオが設計したオリンピコ劇場を見に出かけ「えもいわれぬほど美しい」と日記に記した。彼は以前からパラディオに興味があり、「古代を生かす現代の建築家」「内部から偉大性を発揮した人物」と語っている。それは、円柱と囲壁を調和させるという困難なことをも実にうまく解決しているからだ、とゲーテは捉えている。

イタリアの建築物は主として石で出来ているが、パラディオは石以外の他の素材にも注目していた点に驚嘆の眼を注いでいるのである。

旅行社に無理を言って、通常のツァには入っていないヴィチェンツァに寄り道をして貰い、私達はオリンピコ劇場を訪ねた。小さな入り口から入ると、外側は石、しかし内部の観客席となる階段状の空間は木で作られていて、何かほっとするような温かさに迎えられた。正面の舞台は奥行きがあって、まるで吸い込まれそうだ。アラバスタ（白大理石の一種）の列柱が木の床から立ち上がり彫像の数々が壁に組み入れられている。垂直と水平が織り成す美学は、何という幻想のるつぼであることか。

そこでは永年オペラが上演され、時を超えて人々の楽しみの空間となっている。（16世紀）



16. ヴィチエンツァのロトンダ

ヴィチエンツァはパラディオの町ともいわれ、彼の作品が数多くある。ゲーテのいう金殿玉楼、通称ロトンダは2町ほど郊外の丘の上にあった。6本のコリント式円柱で構成された玄関には、四方どこからでも行くことが出来、円形の広間に上から光が降り注ぐ有り様は、ゲーテが書いている通りであった。

ゲーテは「建築術上これ以上贅をつくした例は他にあるまい。階段と玄関との占めている面積は、家屋そのものの面積より遙かに広い。・・・住めば住むことも出来るが、住み心地が良いとはいえない」と現在でも問題になる空間の有効性のポイントを鋭く見抜いている。

しかし、この建物の発注者は四面が開放された中央の空間で、詩作や作曲の出来る空想の世界を求めたらしい。パラディオは水、火、空気、地の四要素を永遠を示すドームで纏め、見事にお客の注文に応えたのだった。

私達が訪ねたときは現在の持ち主がパーティの準備中とかで、中には入れて貰えなかった。こんな建物で開かれるパーティとは一体どんな雰囲気なんだろうと想像し、羨ましいなとも思った。それにしても美しい丘の上の館である。(16世紀)



17. ヴェローナのアリーナ

カールスパートを出発して14日目、ゲータはヴェローナでアリーナと呼ばれるローマ時代の円形劇場を訪れた。「古代の重要記念物のうち、私の見る最初のものであり、しかもそれは実によく保存されている」と記している。中に入り、そして又階段式の客席を上がって、周縁を歩き回った時、「何か雄大なものを見ているような、しかも実は何も見ていないような、一種異様な気持ちがあった」ともある。「何か物珍しい事が平地に起こり、皆がたかってくる、後方の連中は百方手をつくして前の連中よりも高くなろうとする。ベンチに乗ったり、樽を転がして来たり、馬車で乗りついたり、板をあっちこちに掛けたり、近くの丘に登ったりする。そして忽ち噴火口のような格好になる。・・・建築家はこの噴火口式のを人工式にこしらえる。それもできるだけ簡素にして、民衆自身はその装飾になるような具合にする。こうして集まってきたとき、群衆は思わず自分自身に対して驚嘆したのである」

ゲータは古代のアリーナの設計思想を解説し、群衆のいない劇場では何も見ていないのと同じだと言っているのである。私達が訪れたときはオペラ「アイダ」の舞台準備中だった。自分も大観衆の一員になって大好きな「カルメン」の舞台が観られたらどんなに素晴らしいことかとも思った。(紀元前1世紀～3世紀)



18. ミラノのドウオモ

ゲーテのイタリア紀行には「ミラノの女性」は登場するが、彼自身がミラノを見聞したという記述はない。ヴェローナからミラノまでは150km、200年前の馬車の時代には「ちょっと寄り道」という距離ではなかった。ここはゲーテの案内なしでご報告させて頂こう。

ゴシック建築と言えばパリのノートルダム寺院を連想する人は多い。しかし、私の目には断然ミラノの大聖堂の方が繊細で美しく感じられた。500年の歳月を掛けただけのことはあり、135本の尖塔を初め、それは実に念の入った大建築である。「ローマのサン・ピエトロ寺院に次ぐ大聖堂を・・・」というミラノ領主の合い言葉に応じ、ロンバルディア人、フランス人、ドイツ人の指揮の下に多くの人々の努力によって1887年に完成された。ノートルダム寺院の完成は1250年であるから、これを見た負けず嫌いのミラノの領主様の意地が貫き通されたのかも知れない。

尖塔上のブロンズ像を望遠レンズで眺めると、これを造った人は相当の凝り性であったことがよく分かる。(14世紀～19世紀)



19. ミラノのガッレリア

ドウオモ広場の一角にある凱旋門もどきの巨大なアーチはミラノっ子自慢の「ガッレリア」、つまりヴィットリオ・エマヌエレ2世のアーケードである。見事な床のモザイク、明るく高い天井、新バロックと新ルネサンスの混ざり合ったこの建造物は、世界有数のアーケードに伍す堂々たるものであった。ここには老舗のカフェやプラダ（バッグ）、ボルサリーノ（帽子）などの高級店がずらりと並び、食べ物屋、土産物屋もあってミラノっ子お気に入りのアーケード街となっている。（1877年完成）



20. スフォルツァ城の安らぎ

1450年フランチェスコ・スフォルツァ公爵の命によって建てられたこのお城はフランス軍やスペイン軍に攻め込まれて、その度により堅固な要塞へと変容していった。城の真正面のフィラーレ門から入ると昔練兵場に使われた中庭がある。ここは非常時におけるミラノ市民の避難所になっていたらしい。高い城壁と四角の銃口は殺風景であるが、厚い煉瓦造の壁に囲まれた大きな空間は、ここに逃げ込んだ市民にとって「先ずは一息」という安らぎの空間となったことだろう。

私達の訪れたときは、鳩の群れ遊ぶこの広場では、昔ここでどんな事が起こったのか知る由もない観光客が、三々五々楽しげに何かを語り合ってくつろいでいた。(15世紀)



★あとがき

ドイツ語の副読本の「若きウエルテルの悩み」で初めてゲーテにお目に掛かったときは、ゲーテのドイツ語はなんて分かりにくいのかと嘆いたものだ。それが先入観になって今一つ彼の作品に芯から親しめなかったが、今回のイタリア旅行を通じてその偉大さを認識し、私は改心した。深い教養に根ざした的確な判断と「知的凝り性」に限りなき共感を覚えるからである。

ギリシャ・ローマの古代人は政治、経済、文学、哲学、芸術、動物・植物学などに通じるマルチ人間だったらしい。ルネサンス（再生）は古代への再生であるとすれば、ルネサンスの担い手もダ・ヴィンチのようなマルチ人間が多かったのだろう。そして想像以上にゲーテもレベルの高いマルチ人間であった。

分業が進んで複雑化した今の世の中では、知識も仕事も専門化して他業種や他の分野の事となると極端に分からなくなっている。怪しげな軍事専門家やオウム評論家が大きな顔で、盛んにブラウン管に登場する時代なのである。我々がゲーテのようになるのは無理としても、出来るだけ視野を広めて今まで知らなかった世界にも関心を持つようにしたいものだ。

豊かな人生というのは決して狭い殻の中で得られるものではなく、一人でも多くの友人を持って心おきなく話し合いの出来る場を沢山持つことが必須だと考えるからだ。

ゲーテの紀行文を道案内にして、古代と中世と現代の同居するイタリアでその文化遺産を訪ねる旅は、全く魂が揺さぶられるような感激の連続する10日間であった。

以上



(ローマ人)



(ピサの洗礼堂)